

2023年10月号

故郷の人物を知ろう

たかおか おん こ ち しん 温故知新

近代高岡文芸の盟主 / いかにいたけ かど(もん) 筏井竹の門 (1871~1925)

筏井竹の門は、郷土の文芸発展に貢献した俳人・俳画家で歌人です。本名は向田虎次郎といい、金沢で旧藩士の末子として誕生しました。号は竹の門のほか、四石、松杉窟などがあります。1892年高岡へ移住。写生による現実密着型の革新俳句（日本派）を提唱した正岡子規に共鳴し、子規せんじきの新聞や雑誌に投句します。1897年高岡を訪れた子規の高弟・河東碧梧桐に触発され、和田の寺野守水老、同竹湍、山口花笠らと日本派俳句会「越友会」を結成します。以降、高岡の俳壇をけん引しました。

竹の門は同年、綿糸業の北一きたいちに入社し、筏井太物商店の長女と結婚し筏井姓となりました。1902年頃にて

きた地方紙「高岡新報」へ投句して常連となり、1908年頃から選者になりました。温厚な竹の門の元には派閥に関わらず全国から俳人や画家などが集い、多くの後進を育てました。

1911年日本画家・富田溪仙とみたにいせんの高岡訪問を機に、竹の門は俳画（俳句と絵が一体となったもの）に熱中し、独自の境地を切り拓きました。

古城公園内には竹の門を偲ぶ人によって句碑「宴つづく思ひの朝寝さへづれり」が建立されています。（仁ヶ竹主幹）



竹の門自画像(博物館蔵)

問合せ 博物館 ☎ 20-1572